PHARMACY NEWSBREAK
2025年1月16日（木）

卸の営業所なし、地域薬が「急配」

沖縄北部の備蓄センター、1600品目そろえ職員が対応

2025/1/16 04:50

1600品目を揃える北部地区薬の備蓄センター

沖縄県の北部地区薬剤師会は、医薬品提供体制の確保に向け「医薬品備蓄センター」を運営している。医薬品卸の営業所がない地域であることも踏まえ、センターで約1600品目を備蓄し、会員の依頼に応じて月100件以上、薬剤師会職員が必要最少量を「急配」。センターに取り扱いがない場合は、職員が在庫のある店舗を探して買い取り、届けている。浅沼健一会長は、一人薬剤師の薬局が多い上に「離島住民は船移動のため『明日まで待つ』ことができない」と説明。地域事情を踏まえた取り組みだと述べた。

同地区は1市1町7村で構成。会員薬局33薬局のうち約8割（27薬局）が名護市にあり、伊是名村と伊平屋村、東村の3村が無薬局地域だ。また、一人薬剤師の薬局は全体の約4

割、13薬局に上り、会員の高齢化の進展・後継者不足などの問題を抱える。

備蓄センターは、中核病院である県立北部病院が全科で院外処方箋の発行を始めた2002年に設立。同センターは、北部地区医師会病院前にある薬剤師会館と会営薬局が入る建物にあり、北部病院と医師会病院の採用薬を中心に1600品目をそろえる。

●職員3人と車両3台で対応、店舗間融通にも一役

同センターの役割は、いわゆる「二次卸」ではない。患者から処方箋を応需した医薬品の在庫がない場合に、必要最小限を即時に届ける取り組みだ。配送は薬剤師会事務局の職員3人が車両3台で対応。一人薬剤師でも薬局を離れずに取り寄せられることが評判を呼び、利用件数は年々増加傾向にある。22年度は年間1389件、23年度は年間1613件だった。多い日には10件以上の依頼が来るという。利用は1回300円だ。

ここでは店舗間融通の橋渡しの機能も担う。同会が導入するシステムは、各薬局の薬剤ごとの調剤量（調剤日・調剤回数・推定患者数）のデータを管理し、「在庫のある可能性」の検索が可能だ。センターにない医薬品について依頼があった場合、職員はシステムで薬剤名を検索し、在庫可能性が高く、センターから距離が近い薬局から電話で順次確認。在庫のある薬局に出向いていったん薬剤師会で購入し、その後依頼を受けた薬局まで配送している。

同センターは厳格な温度管理を行う遠隔自動管理サービスを導入し、ここで高額薬剤も扱う。このサービスは不動品や未使用品の在庫を卸側が入れ替えてくれるため、廃棄リスクや会員薬局で必要以上の在庫を持つリスクが減る。また停電など異常が発生した場合は随時連絡が来るため、台風の影響を受けやすいこの地域では大きな安心感につながっているという。

高額薬剤を遠隔自動管理する機械

浅沼氏は備蓄センターの運営について「赤字にしかならない」と明かすが「弱者救済の事業」とも述べ、小規模の薬局がかかりつけ機能を果たすために必要な取り組みだと強調。地域には沖縄の方言で助け合いを意味する「ゆいまーる」の精神が根付き、このような取り組みに発展しているとし「地域の薬局同士はライバルではなく、助け合って医薬品提供体制を支えていくチーム」だと述べた。（小泉 壮登）

All documents,images and photographs contained in this site belong to JIHO,Inc.
Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.
Copyright (C) JIHO,Inc.

株式会社じほう

PHARMACY NEWSBREAK　2025年1月16日掲載
［許諾番号20250123_02］株式会社じほうが記事利用を許諾しています。